

勢組中罷出、村切同夜ニ取斗候義ニ付願出候由。尤其の間ハ一庄屋・村役人罷出才判仕候義ニ候へ共、大庄屋儀も打廻、松明の火粗末等不仕様氣を付ケ才判為可申候間、明朔日より三日の夜迄虫焼被仰付被下度旨願書新庄大庄屋差出候付、早崎氏へ差出候処承届候段被申候付、村々不メりの儀等無之様才判可被致旨新庄大庄屋へ書渡候事。(中略)

●延享三子二月上ノ間書留ニ有り。

多擲々吃 波羅跋題 那蛇婆提

右十二字を清き水ニ種壺升入、指にて二十一遍書、何石も一ツにませ時候得ハ虫付なし。享保十七子年西国・四国稲ニ虫付、悉く喰からず所多キ時、安房国ニも虫付けるに此法をなしける。八月ノ中なりしに水に書てかけけるに虫消失せし也。右稲次御氏御渡被成候事。

●豊田丈助解説「久留米藩公用見聞録 郡方下代」一九七四井上農夫

(8)

『石原家記』

●当年大旱魃四月廿三日雨降己後五月中無雨六月夕立少々あり三瀧郡筋は六月初四日廿三日より己来に雨有七月中に二度雨有八月十一日大雨土居崩程の大雨あり堀々のせき歩行渡する故池深むる三瀧筋古来より堀池深る程早魃当年始也六月十四日為雨乞願成就愛宕山神前にて番僧の家を築屋にして操芝居有り<sup>分徳</sup>大夕立雷強相止翌十五日又々致答の処久留米其外見物殊外夥敷山上に人居余り程故相止

●江上々村荒人神祠建立の事例年江上村の田畑余村に入組候

田畑も江上村分に限年々虫入余村決て虫不入年の江上村分は虫入に付柳川垂水村虎之亟と申取出の者を呼考させ候虚是は当村先城主のた、りなりと申出其墓を吟味致候処(後略)

(9) 石原為平『石原家記』上巻 一九七三 名著出版

(10) 久留米市田主丸町では、伝承保持のために現在でも三年に一度イベントとして実施する。近年では二〇一九年に開催された。

(11) 小林照幸「死の貝」一九九八 文藝春秋

(12) 川野和樹「宮入館長の熱い思い」宮入慶之助記念館「宮入慶之助記念館だより」二六号 二〇一八

(13) 『死の貝』によると、日本住血吸虫症の正体が判明してから、この霊験も色あせ宝満宮は寂れたという。

(14) 宮入慶之助記念館「宮入慶之助記念館だより」一四号 二〇一一

参考文献

塘普「病原体発見までの歴史」九州環境管理協会編『筑後川流域における日本住血吸虫病撲滅史』一九八六 水資源開発公団

石井明「日本における住血吸虫研究の流れ」宮入慶之助記念誌編纂委員会編『住血吸虫症と宮入慶之助』ミヤイリガイ発見から

90年―二〇〇五 九州大学出版会

文化観光部文化財保護課編『浮島・青木・江上校区の文化財マップ』久留米市

(ないとう・ひろよ／國學院大學兼任講師)

## 毛越寺延年における深草少将伝説成立とその独自性

篠原 順子

はじめに

小野小町は、平安時代の歌人であり多くの伝説を各地に残す人物であるが、その人物像は、小町歌の十八首のみにあると言っても過言ではない。小町伝説の中に位置づけられる深草少将伝説は、明川忠夫が、能「通小町」「卒都婆小町」と深い関わりがあると指摘する<sup>1)</sup>。

岩手県平泉毛越寺には、一月二十日に「二十日祭」という延年が伝わっている。現在は「卒都婆小町」という演目は行われていないが、かつて取り行われていた時の詞章が残っている。本田安次は、詞章や所作を克明に聞き書きしている<sup>2)</sup>。その内容を見ると、能「卒都婆小町」と能「通小町」を重ねたような内容と伺え、そこに見られる深草少将伝説は、独特のものともみられる。延年「卒都婆小町」という演目の詞章としてでもここに残り引き継がれていくには理由があるのだろうか。

ところで、能「通小町」の形成には三段階がある。申楽談儀によるとAの唱導僧が書き、多武峰で金春権守が演じた能「四位少将」<sup>3)</sup>。次に、Bの観阿弥が改作した能「四位少将」。そして、Cの世阿弥がそれを改作した能「通小町」である。また、能「卒都婆小町」は、能「小町」に、能「四位少将」から百夜通いの部分を取り込まれたと、伊藤正義は『謡曲集』で述べている<sup>4)</sup>。内山美樹子が「通小町」と毛越寺延年(卒都婆小町)<sup>5)</sup>で、延年「卒都婆小町」は、Aからであると示し、百夜通いについては最初から取り入れられていたと述べている。執筆者も、延年「卒都婆小町」は、Aからであると考えるが、百夜通いについては、Bの観阿弥改作時であると考えており、内山とは違う見解を持っている。本稿では、深草少将伝説に焦点を当て、その伝説を考察し、平泉に残る延年「卒都婆小町」の中の深草少将伝説の成立と独自性を見出したい。そして、京都の伝説を見ていくことで、深草少将伝説成立へのB観阿弥の関わりに向けての展開に考察を進めたい。

## 一、深草少将伝説の形成

深草少将伝説は、小野小町を慕った深草少将が百日通つたらあなたのものになるという小町の言葉信じて通つたが、九十九日目で支障が起こり、成就しなかった百夜通いの話である。百夜通いに関する先行研究からその伝説の形成を以下に紹介する。まず通説となつていているのは、藤原清輔の誤訳によると言われるものである。

深草少将伝説の古い記録は、藤原清輔の著した『古今集』の歌論集『奥義抄』<sup>6)</sup>である。「暁の鳴の羽搔き百羽搔き君が来ぬ夜は我ぞ数搔く 読み人知らず」の歌の解説として、男の求愛に対して女が百日自分の元に通つてきて車の榻の上に百日臥したところから想いを受け入れましようかと答え、男は九十九日通つてきたところで親の急死により来られなかった。その時に女が「私もあなたが来ないことに夜を数えて苦しんでいる」と詠んだ歌と示した。藤原清輔が鳥の鳴と牛車に乗る際に使われる台である榻とを誤訳した。清輔が、当時有力な歌人だったのでそのまま訂正されることなく定着したと言われている。

もともとの「暁の」の歌は、小町も少将も関係ない歌であったが、女が小町になったのは、小町の驕慢・零落伝説が影響して特定されていったとされる。片桐洋一は、『小野小町追跡』<sup>8)</sup>で小町の驕慢・零落伝説形成の要因を次の二つあげる。一つは、空海の

と歌を詠んだというものである。この話の原因が百夜通いとされることにより深草少将伝説は完成されるのである。

## 二、深草少将伝説の展開

各地に伝わる深草少将伝説は、百夜通いの基本形が、土地の事情によりさまざまに変化して伝えられているものである。小野小町伝説が、全国のさまざまの地に残っていることと比べると、その数は少なく現在確認できるのは十例である。後に示す毛越寺延年「卒都婆小町」の特徴を示し比較するために、各地十例を祖型としてまとめ、巻末に「全国深草少将伝説一覽」として示した。それを見ていくと、三種類のパターンがあった。それを先行研究からまとめる。一つ目は、小町が、『古今和歌集目録』で出羽国郡司の娘とされたこと<sup>10)</sup>から、東北に纏わる小町の薬師としての存在を強調するもの(1、2、9)で、9は東北ではないが薬師との関連が深い。小町伝承については錦仁が、伝説一覽にあげた1の秋田県雄勝町の伝説地を中心に克明な研究をしているので、それをまとめ深草少将伝説との関連を中心に示す。

錦仁は雄勝町を中心の小町伝説が、それを管理する一族の特別の事情があったことを克明に示した<sup>11)</sup>。もともと小町は、雄勝町において農耕・医療・養蚕・信仰の神として祀られていた。雄勝町における深草少将伝説は、そのような土着の民俗宗教の

書いたとされる『玉造小町子杜衰書』の存在で、若い頃、その美貌で多くの男性を惑わした女が、齢を取り零落してその身を嘆くという展開で、平安後期から中世かけてその主人公を小町に当てはめることでより唱導色が強調されている。また、「見るめなき我が身をうらと知らねばや離れなで海人の足たゆく来る」という『古今集』の小町の歌が『小町集』にも載せられ、(逢おうという気持ちのない私の身のつらさを知らないのか。貴方は飽きずに足の怠くなるまで通つてくることよ)と傍線を引いた部分が驕慢に解釈されて、百夜通いと重ねられた。その生成には、『小町集』の存在が大きい。『小町集』は、小町の色々な説話形成の元となつた。百夜通いもその一つであると片桐は述べる。

鎌倉時代になると、『平家物語』にある紺青鬼説話が代表的と言われる。松岡心平が、「小野小町 愛の夢幻(通小町)〈卒都婆小町〉など」<sup>9)</sup>で述べるように、多くの男性を惑わした小町には青鬼が付きまとい青鬼だけが友というありさまであると述べられており、この小町に付きまとう愛欲執心の鬼が少将であることは明らかであると指摘する。このように、次第に紺青鬼説話により深草少将伝説の骨格が整っていくのである。

また一方で、明川忠夫は、『袋草紙』のあなめ薄伝説を挙げて、小町が冥界にさまよい目が痛くて成仏出来なかつた理由として百夜通いが語られるのだと述べる(注(一)三十七頁)。あなめ薄伝説とは、人の夢に野辺で小町の髑髏が目から薄をはやし、「秋風の吹くごとにあなめあなめ小野とはいははじすすき生ひけり」

上になりたつたものであり、それを語つたものは老女で自身が小町になりきり世の無常を語り地獄の奪衣婆とも重なる仏教唱導あつたと述べる。京都の百夜通いの目印が榎であるのに対しこの地では、芍薬となる。芍薬は薬として用いられており、2、9においては、薬師如来が小町の瘡を治療するあらすじとなっている。その後、菅江真澄の『雪の出羽路』『小野のふるさと』<sup>12)</sup>などの江戸後期の文人達の関与、秋田藩の事情などで民俗性が薄れ、文芸的な彩を帯びてきたと述べている。

二つ目は、京都周辺にあるきわめて能からの影響を受けているもの(3、4、5、6)で、これは能「通小町」(四位少将)から直接の摂取であり、延年「卒都婆小町」もこのグループであると考えるので後に詳しく示す。

三つ目は、京丹後、和歌山、熊本に見られるもの(7、8、10)で、もともと地元にある伝説に地元の事情から少将伝説が取り込まれたもので少将伝説に主眼はない。7は、地元にもともとあつた住持池の由来譚に少将伝説を取り込んだもので、<sup>13)</sup>8も実態のない小町を補完するために少将伝説を取り入れていた<sup>14)</sup>また10は、百夜通いはあるが、地元の娘が少将に残酷な仕打ちをしたため成仏出来ない姿を語る(注(一)六十四頁)。

全国に残る深草少将伝説を見ていくと、地方の実情にあつたように話が変更されていた。少将伝説は、明川が指摘するように起点と終点が必要な百夜通いは、困難さが伴いその数が少ない(注(一)七十八頁)。

そして小町が驕慢ではなく優しい眼差しもある内容が多かった中、10は、厳しく成仏もできないのは、この話が語り物であった点にある。<sup>15</sup>伝説から能など芸能に移るに従い唱導色が強くなり厳しい内容に変わると執筆者は考える。伝説と宗教者との関りにより話に変化することが読み取れる。それでは延年「卒都婆小町」ではどのように描かれたのかそれを次に示す。

### 三、毛越寺延年「卒都婆小町」と能「通小町」「卒都婆小町」の比較

延年「卒都婆小町」は、先に述べるように能の影響を受けた二つ目のタイプに当たりますが、深草少将と小町の描かれ方に独自性がある。現存する詞章と現地調査より、そのことを示していきたい。

かつて延年は、最澄の教えを伝える天台宗寺院で行われたもので、大和はじめ全国で行われていた。しかし現在は、毛越寺ほか、数か所しか残っていない。

岩手県西磐井郡平泉町の毛越寺には、二〇一九年八月に行き、実際に延年の演者でもある藤里侑生氏（三十六歳）より詞章を見ながら延年「卒都婆小町」の謡を聞かせてもらった。延年「卒都婆小町」は、他の延年能同様に明治以降は途絶えている。本田安次は、明治維新の危機と説明していたが、藤里氏に尋ねると、「廃仏毀釈での一山の体制変化はなかったが、僧侶が還俗し他に職を

持つなど環境は変化した。延年は演者から演者への伝承なので、〈卒都婆小町〉については、舞は受け継ぐ人がいなくなり絶えている。謡については、葉王院千葉秀薫や慈光院穂積慈玄より大乗院藤里慈亮が教えを受け、後にテープに移し残る。」と話す。

二〇二〇年一月二十日、実際の毛越寺延年を常行堂で体験した。そこは表に阿弥陀如来、その後戸に摩多羅神が祀られている。常行三昧供の後、後戸に対して野菜が供えられる。その後蘇民祭があり、呼立、田楽踊り、路舞、祝詞、若女、老女、留鳥と続く。留鳥は復刻された能であった。明治以降途絶えるまでは延年能は法会の最後にあり、式三番の後の能三番として、毎年交互に務められた。一番能は「女郎花」（エの年）と「留鳥」（トの年）、二番能は「伯母捨」（エの年）と「小町（卒都婆小町）」（トの年）、三番能は「金力自在」（年不明）と「慈念居士」（年不明）である。江戸後期に平泉に來た菅江真澄も体験し、「かすむ駒形」に実際の延年を見た様子を記している。<sup>17</sup>

次に延年「卒都婆小町」の内容について詞章をもとに示したい。延年「卒都婆小町」は、内山美樹子が指摘するように、能「通小町」と能「卒都婆小町」を合わせたような内容になっている。能「通小町」はABCの三段階あり、能「卒都婆小町」は古能「小町」から現行能になったと言われている。そして、現行能では、百夜通いは、能「通小町」「卒都婆小町」両方に残る。内山は、百夜通いは、A多武峰からあるが、延年「卒都婆小町」の百夜通いについては、能「卒都婆小町」からであると述べて

いる。執筆者は、百夜通いは、B観阿弥からと考えるので内山とは違う。しかし、延年の百夜通いは、能「卒都婆小町」からであると内山同様に考える。執筆者と内山の相違点などそれぞれ主張をはっきりと示すために延年「卒都婆小町」と能「通小町」「卒都婆小町」を比較し、内山説、執筆者説を示す表「延年「卒都婆小町」のあらすじ」を作成したので適宜参照された。延年「卒都婆小町」の筋展開を1〜8に区分し、それぞれを比較したものである。

#### 延年「卒都婆小町」の筋展開

- 1 老残の身の小町と四位の少将の霊との対話
- 2 百夜通いの昔話
- 3 少将の霊、小町を都の中を引き回す
- 4 小町と少将の霊、高野山への道行
- 5 空海と小町の卒塔婆問答
- 6 少将の霊、小町を都へ連れて帰ろうとする
- 7 受戒、二人の誓言
- 8 高野霊域賛美

また、能「通小町」の段階をA多武峰初演、Bは観阿弥による改作、Cは世阿弥改作の能「通小町」とした。能「卒都婆小町」は、伊藤正義の古能推測によれば、ワキ僧が空海かそれに擬す僧であるという。小町の道行きは高野山まで続き、さらに高野霊山賛美の謡があったとも言及されるので、それを示した。現行能「通小町」「卒都婆小町」の筋立ても示す。

#### 能「通小町」の筋展開（下線部分が百夜通い）

夏安居を送る僧と里女が京都八瀬で出会う。里女は、小野小町だと名乗り消える。市原に向き小町の霊と出会う。小町は自身の受戒を頼む。深草少将が現れて百夜通いを再現し、小町の受戒を妨げる。深草少将が、御酒戒を守ったことで、二人とも成仏する。

#### 能「卒都婆小町」の筋展開（下線部分が百夜通い）

高野山の高僧と卒塔婆に座る零落した姥の出会い。卒塔婆問答。姥に高僧が論破される。姥は小町と名乗る。姥に深草少将が憑依する。百夜通いを見せる。仏心を得て小町も少将も成仏する。

次に表「延年「卒都婆小町」のあらすじ」よりこの筋立てを比較してみると、内山説では、初演のA多武峰は、延年「卒都婆小町」とほとんど同じであり、内山がA多武峰からの撰取であるとの指摘は、執筆者も同様に考える。伊藤は、延年「卒都婆小町」が、能の古型とは無縁と述べているが、表で明らかに多くの部分が重なり、A多武峰からの撰取であると考えるのが当然である。百夜通いについて内山は、A多武峰「四位少将」からではなく能「卒都婆小町」からであると詞章の比較から述べている（注（5）五十七頁）。その点は執筆者も同様である。しかし百夜通いについては、A多武峰「四位少将」にはなく、B観阿弥の改作時と考えている。百夜通い撰取時期につい

	延年「卒都婆小町」のあらすじ								備考
能の演目	1	2	3	4	5	6	7	8	
多武峰 (A)「四位少将」	○	○	○			○	○		内山説
観阿弥 (B)「四位少将」		○	○				○		世阿弥改作
能「通小町」		○					○		古能「卒都婆小町」
能「小町」				○		○		○	
能「卒都婆小町」		○	○		○				
多武峰 (A)「四位少将」	○			○		○	○		執筆者説

ではここでは問題ではないので、後でまた触れることとした。

まとめると、1は『玉造小町子壮書』の内容を示し、2の百夜通いは、改作後の能「卒都婆小町」より、3、4、6、7は、B多武峰「四位少将」より5、8は古能「小町」からとなる。次に延年「卒都婆小町」の姿について詞章より見ていく。

延年「卒都婆小町」は、内山が指摘するように、紺青鬼説話を脚本化したようである。『平家物語』では小野小町に青鬼が離れない例を挙げて、あまりにこの世で人を拒み続けると相手は青い鬼になりあの世までも憑くから通盛の愛を受け入れるように女院が小宰相を論ずるのである。松岡心平は、能「通小町」は、この紺青鬼説話のフレームワークの上に、百夜通いの歌説話をのせ、その主人公を深草少将（出典は見当たらない）と小野小町にして結構したものと「小野小町 愛の夢幻（通小町）（卒都婆小町）など」（注（9）八十七頁）で述べている。松岡によると、紺青鬼説話とは貴族の女性に近づく機会の多かった祈

禱家や唱導家の間に育ち語られた説話で、僧が高貴な女性に恋慕し憑くという話柄だという。既に述べたが、鎌倉時代から『平家物語』で見られるように、小町には紺青鬼が付きまとい成仏を妨げているという紺青鬼説話が語られるようになり、それが深草少将伝説につながっていったのである。延年「卒都婆小町」では、直接深草という名称では語れないが、少将としての百夜通いがあり、その後小町が紺青鬼となった四位少将に付きまといわれ、引つ立てられ、京都の町から高野山を目指す様子が語れている。その詞章には、鬼が小町を引つ立て行く様子なども示されている。その部分を詞章から示す。

ツク（地謡）かしこに恥をさらさんとて、急げや小町遅し  
とて、先に追立連行

ワキ（小町）情けなしとや少将

ツクは、地謡であるが、少将の言葉で代弁する詞章で、それに対して小町も情け容赦ないと答えている。内山は、延年「卒都婆小町」での（深草）少将は、紺青鬼として小町に付きまとい攻め立てることのみを取り上げていたが、詞章を吟味すると小町に付きまといた紺青鬼の少将（深草）と小町との関係にはある種の睦まじさを示すところもある。例えばその後空海が卒塔婆に座る女（小町）をおったてることに対しての詞章である。

あったことが読み取れ、その後も続いていたのではないだろうか。それは、延年「卒都婆小町」の詞章からも読み取れる。その詞章には具体的京の街並みが出てくるのでそれを示す。

ツク（地謡）此の都の内は、内裏仙洞関白殿下、槐門大守、  
ゆうゑいをはじめとして、あやかや坊門姉三条、錦猪  
の熊室小路、西の洞院烏丸、門々に面をさらさせ、か  
しこやこ、の辻車、めぐりて物や戀衣の、袖にも餘る  
我思ひ、ここにも恨みが盡せねば、女も通はん高野山

傍線部は、京都の古い通り名である。次に示すのは通り名と現在の通りの名称の比較である。<sup>22)</sup>

東西の通り（詞章↓通名）  
あや↓綾小路、かや↓不明、坊門↓三条坊門小路、姉↓姉小路、三条↓三条大路

南北の通り（詞章↓通名）  
錦↓錦通り、猪の熊↓猪熊小路、室↓室町小路、西の洞院↓西洞院大路、烏丸↓烏丸大路

能「通小町」には見えないので、明らかに京都を意識して延年「卒都婆小町」に挿入したと考える。具体的な名称を入れてもそれが理解できるほど、平泉の人にとっては、京の都は身近

少将は、空海の仕打ちに対して小町に同情している。その後、小町の袖を取って、京の都にも戻ることを促している。

シテ（少将）や如何なることの際、かほどにやせおとろへ  
ふるへとうる女を引つ立て擲なまれ申事の悔しさとよ

シテ（少将）むかし我、角糝ましき中なれば  
ツク（地謡）悔し顔なる道行つれ、つれながらも急がれて、もとの都に歸らん、花の都に歸らん

延年「卒都婆小町」は、紺青鬼が小町に付きまとうという冷たい関係だけではなく、それぞれに愛情を感じるように変化した様子が描かれていて、最後に受戒の後、見物の衆も共にそれを祝福するというような様子もあった。それは、延年「卒都婆小町」にみる深草少将伝説の特有の姿と言える。

また、数十曲あった演目の中でこれが残った理由は、平泉と京都との深い結びつきがあると執筆者は考える。もともと奥州藤原氏初代の藤原清衡は京都と平泉の地形が似ていることで、ここに都を造営したと角田文衛は、「平泉と平安京の見過ごされていた関係」<sup>20)</sup>で述べる。また、都を造営した清衡は、京都に憧れ京都の文化を積極的に取り入れたとも述べる。『吾妻鏡』<sup>21)</sup>によると、金堂、常行堂など毛越寺の主な伽藍造営の時は、東山道、東海道は往来が一時も切れ目なかったとも記載され京都との交流が盛んで

で憧れの地ではなかったのだろうか。また、詞章の中で注目するのは、東北特有の習俗である錦木を引用していることである。これは、東北の男女が愛を成就するために錦木を目印にする習俗で、どこか百夜通いを彷彿とさせ、能「通小町」にはない延年の独自性である。その部分を示す。

シテ(少将) 山尾の尾を隔てたる心地して、何をかさのに錦木の、数は積もれど遇ぬ故、通はじはやとは思へども、賤の女が、さむききぬたの去り逆は、打捨てがたき道なれば

また、東北の地名も織り込んでいることである。それは、伝説がその土地のものとして伝承されていく過程と同様である。本田もこの演目が延年に残った理由は、歌枕を取り込んだことにあると指摘する。その詞章の部分も示す。

ツク(地謡) もしや遇せぬ居待月、陸奥の阿古屋の松に木隠て、出てもやられん闇(くら)き夜に

ここで「阿古屋の松」について触れているが、これは、歌枕でもあり、世阿弥作の能「阿古屋の松」から引用したものである。陸奥守藤原実方の話で、東北ゆかりの有名な説話もある。それを引用することで、より人々に親近感を持たせたのである。

ていたが、父の急死でここに籠っていたところ、一条に邸宅のあった深草少将に、切なる胸のうちを訴えられたが、父の中陰だからあと百日待っていて欲しいと伝え、少将の百夜通いが始まった。いよいよ百夜、小町は訪れを待ったが、少将はこない。実はその夜、三年前に少将の父が応天門に放火したことが発覚し、父は伊豆へ、少将は隠岐へ流されたのだという。それを知り小町は、深く恥じて、少将に掬を立てた。少将は隠岐の島で亡くなる時小町の夢枕にたった。小町は少将の菩提を弔い九十歳の長寿で亡くなった。ある日親交のあった西行法師と恵心僧都が訪ねてみると、風雨にさらされた小町の髑髏からススキが生えていたので、二人はねんごろに経を誦し、手向の歌を詠むと小町の亡霊が現れて、「秋風の吹くにつけても あなめあなめ 小野とはいはじすすき生ひけり」と詠んだという(補陀洛寺に伝わる伝説)

この伝説の残る補陀洛寺は、もと静原にあった清原深養父が建立した補陀洛寺の名を継いだものである。清原深養父は、平安時代中期の歌人中古三十六歌仙の一人であった。吾妻鏡には、文治五年(一一八九)奥州の藤原基衡が毛越寺の吉祥堂を建立するに当たり、補陀洛寺の本尊千手観音像をまねて造ったとあり、当時は平泉毛越寺と関わりがあったと考えられる。上に挙げた補陀洛寺に残る深草少将伝説は、応天門事件など歴史的史実を取り込み、あなめ薄という小町の歌と説話が取り込まれての貴種流離譚となっている。市原野での百夜通いは、一条寺か

延年「卒都婆小町」が、残った理由は、その詞章にあった。平泉の人々の京の都への憧れは、いにしへの藤原三代の栄華の時代への郷愁と繋がり、一方では地元の習俗も取り込み演じられてきたことで定着した。延年「卒都婆小町」も、今まで見てきた各地の伝説と同様に地域の事情と結びつき、変化して演じることで伝承されてきたのである。そしてこれは深草少将伝説としては、鬼となった四位少将が、小町に付き纏う、そして情を通わせ互いに成仏を得るという独特の姿を示すものであった。伝説から能という芸能になると厳しい関係となる小町と少将も延年では微笑ましい姿で語られる。そのことが、延年「卒都婆小町」の独特の姿であった。それでは、鬼能であったA「四位少将」がどのように能「通小町」の深草少将へと変化していったのだろうか。それについては京都の伝承地を調査することでその手掛かりを探っていきたい。

#### 四、京都の深草少将伝承地の実態

京都における深草少将伝説は、明川忠夫が指摘するように能「通小町」「卒都婆小町」の舞台のある場所にある。京都の市原野、山科、深草およびその付近にある小野氏ゆかりの場所も併せて深草少将伝説を探訪し、考察を加えていきたい。

##### (一) 市原野(補陀洛寺周辺)

(巻末の伝説一覧3) 小町は和歌に長じた絶世の美女で宮仕えしら補陀洛寺へ通う話となる。徒歩で一時間に二十分と少し距離は長くなるが、通えない距離ではない。これは、能「通小町」の成功から、そこにゆかりのある市原野の補陀洛寺が隋心院の百夜通いを取り込んで、伝承地として寺内を整えたと考える。

市原野は、京都の鬼門に当たる赤山禪院が近く背後には、比叡山がある。ここは、京の埋葬地に当たり宗教者も多く居住していた。この地は、能「通小町」で成仏を願う小町がさまざま場所として相応しい。その元となったのは、この地で古くから行われていた魂祭りである。魂祭りについては、現地調査を含めさらに検討したい。

##### (二) 隋心院(隋心院御霊町)とその周辺

(巻末の伝説一覧4) 小町を見初めた少将が、「百日の間、私の元へ通ってくれましたなら、貴方の想いのままになります」と小町からいわれて、雨の日も雪の日も通い続けて九十九日、後の一日残すばかりのこの日、発病の為、降る雪に埋もれてこの世を去った。小町は、少将が来るのを榎の実で教えていた。(京都市山科小野御霊町 隋心院)

隋心院は、七世親嚴僧正の時に後堀川天皇より門跡寺院となつたことから、小野氏に繋がる小町を取り込むことになったと明川は指摘する。(注(一)五十六頁) 寺伝によると、小町は、九十九個の榎を少将が通ってきた道に植えたところがあるが、現在で

も境内に二本だけは残る。また百夜通いを取り込んだ深草少将が欣浄寺に通う道が「小町化粧井戸」の西側にあり、その小徑にかつてはひなびた茶屋もあったそうである。能「通小町」の百夜通いに沿うように伝説が仕立てられていることがわかる。また、三月の「はねず踊り」にも、結末の違う深草少将伝説が残る。もともとは、随心院で語られた伝説がもとになっているが、代理人を立て見破られ深草少将の思いもおじゃんになったと囃される。毎年、はねずの咲く頃に、里の子たちが家々を訪ねて門内の庭で踊っていたといわれる。随心院の伝説とはねず踊りでの結末の相違は、わらべ歌として里で歌われ舞われてきた経緯から滑稽さを加味するための変更だと執筆者は考える。周辺にも少し視点の変わる伝説が残るので次に示す。

(巻末の伝説一覽5) 小野小町は仮の居住として随心院にいた。小町は絶世の美女、深草少将が小町に懸想した。少将は、現在の師団街道の辺りに住んでいた。深草は、小町をものにすべく艶書を書き続けた。小町は、少将があまりに熱心なので、ほどされて百日通って下さつたらお話を聞いてもよいですと答へ、少将は、毎日、中の茶屋という峠を越えて通っていた。ところが、もう明日が百日目、小町は、心待ちにしていたが、深草少将は、九十九日目に寒さのために息絶えて死んだ。小町は、慙愧に絶えず、榎の実を随心院の近くに撒いた。なんでも九十九本撒いたというが、全部つかなかった。今ある小町地蔵は少将

が小町に送った艶書で作ったものであり地蔵堂にあったが、今はわからない。(京都市山勤修寺風呂屋敷町)

この話は、小町地蔵縁起であると明川は、指摘する(注(一)六十頁)。小町地蔵は、少将が小町に送った艶書を固めて造ったもので、昔、瀧谷路傍にあった比丘尼が管理する「玉草地蔵堂」にあった。瀧谷路は、京都の埋葬地鳥辺山の中を西から東へ貫く路で、現在その玉草地蔵は、東福寺退蔵院に奉られている。もともとは小町に懸想した僧達の艶書であったものがあり、後に深草少将伝説を取り込むことで出来上がったものではないかと考える。

### (三) 深草—欣浄寺周辺

(巻末の伝説一覽6) 傳へ云フ。此地(欣浄寺)ハ往昔四位少将ノ宅地也。故二世深草少将ト云フ。(中略)少将小町ヲ恋スルニ小町其志情浅深ヲシランタメ、車ノ欄ニ百夜通ウベシト。少将則此所ヨリ小野ニ通フ。小野ハ此レヨリ東方ニ当テ一里餘ニアリ。今墨染ノ東、大亀谷ヲ経テ小野ニ至ル。(京都市深草欣浄寺、『山州名跡志』江戸時代中期)

これは、欣浄寺に残る深草少将伝説である。昨年夏に、当寺に伺い深草で生まれ育った住職の奥さんから、少将と小町の百夜通いは昔から知っていて信じていると言われたことが印象に残った。深草は、和歌の歌枕になる土地柄であり平安時代から多く歌

が詠まれた。寺には、少将と小町の墓もあり、墨染の井戸、艶文で作られた深草少将像などもあった。墓については、再築されたもので古くない。背後の竹藪中には、「少将通い道」と言われる小路があつて、秀吉の伏見在城の頃、訴訟あるものはこの道を通ると願いごとが叶わなかったとつたえるが、現在では、宅地化されて道がなくなっていた。随心院と欣浄寺は、深草少将伝説を形成する時に対のような関係で、欣浄寺と随心院があることで百夜通いは成立した。欣浄寺から四百米離れる大亀谷は、念仏僧が集まる場所であつた。そして、醍醐寺西惣門には、散所があり、大亀谷の三昧僧が散所まで通った話から百夜通いは出来たのではないかとその成立には多くの雑芸人の関与があるのではないかと明川は述べる(注(一)五十頁)。執筆者も醍醐寺は観阿弥が京都進出の足掛かりとした場所で、そこでこの話を聞き、観阿弥が能に取り入れたのではないかと考える。それを論証していくのはこれかの課題となるが何にしても随心院と欣浄寺が少将伝説成立に深く関わっているのは間違いない。

## 五、深草少将伝説成り立ちについての考察

### (一) 深草少将伝説の初期の姿

延年「卒都婆小町」は、Aの多武峰の「四位少将」をもとにしたもので、執着の紺青鬼に憑きまとわれ成仏できないが、最後には空海という宗教者により共に成仏する姿という唱導能で

あつた。延年「卒都婆小町」は、京都を舞台にした能「通小町」「卒都婆小町」と共通の祖型を持つ初期の深草少将伝説を伝えると本稿では述べてきた。そして、「四位少将」初演の多武峰は、日本で最初に道教寺院が建てられた場所でもあつた。また道教にゆかりの深い赤山禅院周辺が示すように、小野氏には鬼門を守る存在として、地獄に自由に行き来ができるという伝説を持つ小野篁がおり、巫女的な存在としての小町もいた。そうなること、紺青鬼に付きまといられる延年能の小町の姿は、一見矛盾するようであるが、それは中世の女人不浄説による小町像の変化と考えるのでさらに整理し考察を進めたい。

### (二) 和歌からの深草少将出現

深草少将伝説は、和歌が重要な要素である。主人公である小野小町が、有名な歌人であり、『古今集』の十八首のみが確実な歴史資料であること、また、藤原清輔の書いた歌学書『興義抄』の誤訳、さらに深草少将が深草という和歌の連想により作られるなど、常に和歌が元にあつた。さらに平泉の延年から、あらたに清原深養父という存在がみえてきた。京都の深草少将の伝承地である市原野の補陀洛寺の本尊を、平泉毛越寺が写して吉祥堂を建て本尊にしていたという。その背景には、当時の京都と平泉との深い関りがあつた。市原野と平泉毛越寺を結びつける人物としてのその補陀洛寺周辺に別荘を持ち、建立に関わったとされる清原深養父がいた。もともと和歌に携わる人の間で

は、百夜通いは広く語られていたのではないかと考えられる。

和歌は、掛詞、縁語など言葉のレトリックによるイメージを膨らませるもので、連想を用いる謡曲の詞章の作り方と発想は同じであるとされる。「四位少将」という名前の能から深草少将に転じたのは、「小町への思いが深い深草」であり、深草は地名ではなく懸け言葉、縁語の類として使われたのではないかと考えられる。そして深草の言葉と重ねて隣接する墨染寺の儂い墨染桜のイメージも重なったのであろう。

また、掛詞といえは四位は「権(しい)」で百夜通いは「欄」など木に纏わる話でもある。また、四位という位は、三位までが朝廷の中枢に仕える高級官僚で、四位からは地方赴任もある地位ではあるがその最上位で、あこがれの官職でもあった。そのような和歌の連想から深草の少将は、形成されたと考える。そしてその和歌につながる深草、市原野そして小町の里にある伝説が巧みに能「通小町」に取り込まれ、そこが伝承地になったと考える。

### (三) 九十九という習俗の受容

深草少将伝説の百夜通いについては、重要な点は、九十九という数である。桜井満が、「伝説のふるさと」(注(24) 百四頁)で述べるように、そこには九十九の習俗がみえる。深草少将が、九十九日通い、あと一夜を達成できなかったのは、百という数字の完結性といわれる。桜井満は、そこに民族信仰の型があると説く。熊野の九十九王子、地名で九十九里浜、越後の九十九

曲河など、さまざまの九十九伝説を紹介し、百なり千なり完全な世界になって現れるのが神で、悲願成就できるのは、神に祝福されたもののみであると説明する。また市原野の深草少将伝説で小町が少将を拒む理由として中陰であることを告げるのは、宗教者であるからとも述べている。もともと、日本にあった九十九の習俗が、小野小町と結びつくことで、深草少将という悲劇の主人公を作ったのである。

### (四) 深草少将伝説と観阿弥の京都進出

平泉毛越寺延年における深草少将伝説は、既に述べてきたように唱導僧が作った能「四位少将」のA多武峰から影響を受けたものである。鬼能であったA「四位少将」に、百夜通いが取り込まれたのは、B観阿弥の改作である「四位少将」であったと考える。そこに、観阿弥の京都進出があったのではないだろうか。百夜通いの伝説地は、和歌ゆかりの場所であると同時に京都の埋葬地付近でもあり、そこには多くの宗教者がいたと考えられる。明川忠夫は、京都の醍醐寺西惣門は宗教者の集まる場所であったと述べる(注(1) 四十九頁)。観阿弥の京都進出の成功は今熊野神社での將軍の観能であったが、その前の醍醐寺での興行が成功の足掛かりであった。醍醐寺演能の時に、深草という地名に地元の百夜通いの説話を取り込み、観阿弥によるB段階の能「四位少将」ができあがったのではないだろうか。それを世阿弥が改作して、Cの能「通小町」となったと考えて

いる。この結論については、今後さらに、京都進出の演能記録などを調査して、いっそう信憑性を高めたい。

### おわりに

延年「卒都婆小町」の深草少将伝説の成立と独自性から、能「通小町」へと繋ぐB観阿弥の改作「四位少将」へと考察を進めていった。京都の伝承地は、能「通小町」「卒都婆小町」と深く関わりを持ち、多くの宗教者が集う場所でもあったことに触れた。深草少将伝説には、そのような宗教者の関与も考えられるので、これからは、登場人物が深草少将と小野小町となり定着した時期について、観阿弥の京都進出を綿密に調査すること、さらに研究を深めていきたい。

### 注

- (1) 明川忠夫『小町伝説の伝承世界』二〇〇七 勉誠出版
- (2) 本田安次『延年』一九六九 木耳社
- (3) 世阿弥(著) 田中裕校注『申楽談儀』『世阿弥芸術論集』一九七六 新潮社
- (4) 伊藤正義校注 新潮日本古典集成『謡曲集』中 一九八六 新潮社
- (5) 内山美樹子(「通小町」と毛越寺延年(卒都婆小町))『演劇学三十三』一九九二 早稲田大学演劇研究会

- (6) 佐佐木信綱『日本歌学大系』第一卷 一九五七 風間書房
- (7) 三善貞司『小野小町攻究』一九九二 新泉社
- (8) 片桐洋一『小野小町追跡』一九七五 笠間書院
- (9) 松岡心平『小野小町 愛の夢幻(通小町)(卒都婆小町)など』『国文学』二十八 一九八三 学灯社
- (10) 藤原仲実『古今和歌集目録』続群書類従完成会編『群書類題』第十卷 一九八六 続群書類従完成会
- (11) 錦仁『小町伝説の誕生』二〇〇四 角川選書
- (12) 内田武志・宮本常一編『菅江真澄全集』第一卷「小野のふるさと」一九七一 未来社 第十一卷「雪の出羽路」一九八〇 未来社
- (13) 注(1)の七十五頁にある岩出町誌による伝説
- (14) 注(1)の六十二頁(妙性寺寺記)、百七十六頁
- (15) 成田守『盲僧の伝承』一九八五 三弥井書店
- (16) 本田安次 本田安次著作集『日本の伝統芸能』第十五卷 一九九八 錦正社
- (17) 内田武志・宮本常一編「かすみ駒形」『菅江真澄全集』第一卷 一九七一 未来社
- (18) 伊藤正義『作品研究 卒都婆小町』『観世』一九八二 檜書店
- (19) 伊藤正義『伊藤正義中世文華論集』第一卷 二〇一二 和泉書院
- (20) 角田文衛「平泉と平安京の見遇」『さされていた関係』平泉町史編纂委員会『平泉町史』総説・論説編 一九八八 続群書類従完成会



- (21) 「文治五年毛越寺事」新訂増補国史大系『吾妻鏡』第三 一九六八 吉川弘文館
- (22) 『平安京図会』二〇〇五 京都市生涯学習振興財団
- (23) 能「錦木」機織る女の戸外に千束の錦木を立てた男が三年後 思いを遂げたという筋の複式夢幻能。世阿弥作
- (24) 桜井満『伝説のふるさと』一九七九 日本書籍

参考文献

- 能勢朝次『能楽源流考』一九三八 岩波書店
- (しのはら・じゅんこ)『國學院大學大学院』

全国深草少将伝説一覽

府県	住所	小町の出生地	設定について		百夜通い			小町のその後	備考(出典)		
			小町の居住地	病気	少将の動向	起点	終点			数え方	少将の結末
1 秋田	雄勝郡雄勝町小野	雄勝町	勝	抱瘡	小町を追い東下り	長鮮寺	小町宅	数え方	増水の川に落ち死亡	岩屋堂に籠り自像を刻み92才で死亡(明川忠夫)	『小町伝説の伝承世界』(明川忠夫)
2 山形	米沢市塩井	京都	京都↓奥州の父の所(米沢)	人の忌む病	小町を恨み死亡	なし	なし	植えた芍薬	恋裏れ死亡	薬師如来を祀り病死(明川忠夫)	『小町伝説の伝承世界』(明川忠夫)
3 京都	京都市左京区市原野	京都市市原野	宮中↓市原野	なし	小町に懸想	一条寺	市原野	なし	隠岐に流罪	隠遁し死亡	『伝説のふるさと』(桜井満)
4 京都	京都市山科小野御堂町	出羽	宮中↓隨心院	なし	深草の欣浄寺に住む	欣浄寺	隨心院	糸に綴る榎の実	病死	共に葬られる	『小町伝説の伝承世界』(隨心院)
5 京都	京都市勸修寺風呂屋敷町	なし	隨心院	なし	艷書を小町に書く	師団街道	隨心院	なし	寒さで死亡	慚愧から榎を蒔く	『小町伝説の伝承世界』(明川忠夫)
6 京都	京都市深草欣浄寺	なし	隨心院	なし	深草の欣浄寺に住む	欣浄寺	隨心院	なし	病死	少将も小町も共に葬られる	『小町伝説の伝承世界』(明川忠夫)
7 京都	京丹後五十河	なし	病死	不明	小町を追い都から来る	なし	なし	なし	なし	少将も小町も共に葬られる	『小町伝説の伝承世界』(明川忠夫)
8 和歌山	和歌山市岩出町住持池	根来山西坂本(桂姫)	根来山西坂本(桂姫)	なし	毎夜忍び寄る	なし	なし	なし	なし	大蛇の少将と住持池で暮らす	『小町伝説の伝承世界』(明川忠夫)
9 岡山	都窪郡清音村黒田	備中國都窪郡清音村黒田	備中國都窪郡清音村黒田	瘡	対岸に住む(金麻呂)	黒田	対岸	なし	冷えて死亡	冷性、蛭などを治す	『小町伝説の伝承世界』(立石憲利)
10 熊本	鹿本郡植木町小野	植木町小野	植木町小野	なし	立石の神社に住む	立石の神社	植木町小野	なし	小町に騙され川に落ち死亡	鬮となり晒され	『小町伝説の伝承世界』(明川忠夫)

## 東日本地域の寺院における八百比丘尼縁起の成立について

### 富 樫 晃

#### はじめに

東北から九州にかけ広く分布している八百比丘尼伝説のうち、南東北・北関東にかけて八百比丘尼の開基伝承と共に、その伝承を取り入れた開基縁起が現存する寺院が存在する。

福島県喜多方市にある金川寺では、八百比丘尼縁起や八百比丘尼の遺物等数点が寺宝として残されており、八百比丘尼伝説がこの寺院にとって非常に重要な役割を持つていたことがうかがえる。この寺の開基由来として、『新編会津風土記』では、若狭小浜から来た老尼が建立したという伝承が正式な縁起として紹介されているが、都から会津に流されてきた秦勝道の娘が九穴の貝を食べて長生し、この寺を建立したとの俗説が併記されている。ところが、現在寺に残されている八百比丘尼縁起等では、『新編会津風土記』で俗説とされる内容が正式な縁起とされており、先行研究では俗説が元々地元には伝わる口碑であり、先行した縁起で

あつたろうとする説と、それを疑問とする説がある。

そこで、この金川寺の縁起と、栃木、埼玉の各寺院に残されている八百比丘尼縁起について、詳細に分析し、各寺院の縁起作成の目的や年代、また各寺院地域の口碑伝承との関係や若狭小浜からの影響も含めて、東日本地域における寺院の八百比丘尼縁起成立について考察する。

#### 一・福島県喜多方市塩川町「金川寺」縁起について

##### (一) 金川寺開基に関する二つの八百比丘尼伝承

金川寺は、福島県喜多方市塩川町金橋字金川にある曹洞宗の寺院である。この寺院は八百比丘尼が開基に関わったとされる伝承が残されており、『新編会津風土記』巻五十五「陸奥国耶麻郡之五」(表2, No.1参照)において以下のように記述されている。

「昔若狭國小濱より一人の老尼來たりて勝地を相し、この村の